

文献紹介

立命館大学文学部地理学教室・立命館大学地理学同友会編 地表空間の組織—Spatial Organization : 古今書院, 1981年, B5判 551頁

本書は、そのタイトルには記されていないが、谷岡武雄立命館大学教授の定年退職記念論文集である。同博士についてはこと改めて紹介をする必要もないが、かねてから主張され、かつ自ら組織の責任にあたっておられるIGUのワーキンググループのテーマが、「空間組織の歴史的变化」でもあることから、本書のタイトルが決定されたという。

全てで51編の論文が収録されている。そのうち4編がいわば「空間」に関する論考で空間組織（空間経営・空間認識・空間概念・社会的行動空間などさまざまな用語が使用されているが）を多面的にみたもの。また12編が都市地理学分野、5編が農林業および集落地理学、19編が歴史地理学、10編が地形学ないしは応用地理学分野、というように大別することができる。とくに1/2以上が歴史地理学関係の論考によって占められている点に、谷岡スクールの特色がきわだってあらわれているといつてよいであろう。これらの論文について「外国人学者からのメッセージ (B. Barbier, André Brunet, Madame Sylvie Guichard-Anguis, Jean Labasse, Guy Lasserre, Jacques Pezeu-Massabuau, Michel Phlipponneau, Xavier de Planhol, M. J. Wise) が掲載されている。いずれも谷岡地理学を高く評価したもので、氏の国際性が十分に理解できる。巻末に履歴と業績目録が付されている点は、他の類書と同様。

このような論文集を書評ないしは紹介するということは、いうまでもなく至難なことである。その性格上、各執筆者が、各々の最も得意の分野について執筆していきわめて多岐にわたること、さらに紙数の制限もあっていわばコンパクトな論稿が多いこと、などもその一因である。したがって本稿では本誌の性格上、歴史地理学の分野に属する19編の論文のみを紹介するととどめた。

小野忠熙「大陸系山城の考古地理学的考察」は神籠石について、土塁の構造・築城年代・築城主体者の3点を検討したもので、8世紀後半から9世紀前半築城の可能性が強く、大和政権によって第二線の防衛線に立地するとの見解を述べている。これらの見解や、大陸系山城を<古代山城>と<神籠石式山

城>に分けるその用語の使い方等、若干の疑問がないわけでもないが、このテーマについてはすでに氏の業績は定評のあるところ。これに対して同じ軍事的施設を扱った山田安彦「胆沢城の地域空間構成」は胆沢城を拠点として構成された諸施設による地域空間を、宗教や「歴史心理などの形而上的要因」をとりあげて考察しようとしたもの。あえて“ ”内のことや「知覚的歴史地理学」なるものを強調される意味は、なおよく理解しえないが、確かに新機軸は感じさせる。

伊達宗泰「平城京左京の堀川について」は、平城京左京堀川に焦点をしばって流路の変遷を検討し、各河川の実態を明らかにしたうえで菰川および堀川は京造営時より存在した人工堀川であることなどを述べたもので、大きな示唆に富む論考である。

つづく3編はいずれも条里を扱ったもので、中村佐太郎「天神川および日野川下流域における条里制と古代空間」・中野栄治「紀伊半島南部の条里制」は、さしたる眼新しさはないが地道な実証に裏付けされたもの。片平博文「条里型地割内部にみられる一反未満の地積とその分布」は11世紀の奈良盆地を対象として、小地積の種類分布さらに発生のプロセスを追求したもので今後の発展が待望される。

古代・中世の荘園等を扱ったものは3編。倉田康夫「初期荘園の立地に関する一、二の考察」は東寺領伊勢国大國・川合庄の復原をふまえて、その地形的条件と用水管理を論じたもの。桑原公徳「丹後国の古代・中世における郷・保・荘と田積」は氏が従来述べてこられた古代開発と田積の研究の一環をなすものである。田中欣治「三重県三重郡における大安寺墾田」は8世紀の大安寺の資財帳を史料にしてその分布の比定を試みたもの。

意外にも古代交通路に関する論文は乾幸次「田原道考」の1編しか収録されていないが、『続日本紀』に記入された田原道（山本駅と田原郷を結ぶ道）のルートが復原されている。

近世の論文も多い。岡村光展「越後における近世初期の農村集落」は村落内の同族血縁の結合と新田開発・屋敷配置を中心として小村落の構造を検討し、福田徹「伊勢国北部における新田開発の展開」は新田開発量の多い伊勢をとりあげてとくに輪中地域の開発を論じている。また伊藤安男「田原集落」の

提言」は信濃川と円山川の堤防で囲まれた集落を例として提示したうえで、日本各地に分布する類似集落の総称を輪中集落とするより、「囲堤集落」と表現するほうが妥当である、との提言をおこなっている。たしかに「輪中」という用語は固有名詞か普通名詞かを決しがたい面を含んでいることを考えれば、各研究者によって真剣に討議されるべきであろう。

西田彦一「入会林野の解体過程に関する地理学的一考察」は南山城の入会山が解体されていく過程と林野開発による利用形態の変遷を把握したもので昨今の住宅団地開発にもつながる今日の意義をも有している。つづく有蘭正一郎「農書『耕稼春秋』にみる金沢平野の水田耕作法とその地域性」と松山利夫『『秋山記行』にみる文化要素とその組み合わせ』は、いずれも近世の農書や記録による考察であるが、どちらかといえば農学あるいは文化地理の色彩が強く、一般的には歴史地理学分野に分類されにくいものである。本論文集は必ずしも分野別に区分することを明示しているわけではないが、しかし一応の区分はあるようでもあり、その点からすればこの2編の配列については若干の異和感が生じる。(もちろん、これは単に配列上の疑問であるにすぎないが。)

赤阪晋「水利開発と農業景観の変化」は亀岡盆地の扇状地をフィールドとして、近世の用水と土地利用の変化を刻明に調査したもの。富岡儀八「内陸住民の購買圏決定における交通条件」は近世において内陸住民が塩の購買先を選択する際の主要因たる交通条件(距離・傾斜さらに塩の価格なども含めて)を考察したもの。加藤英二「瀬戸山離散説と陶業集落の立地」は応仁・文明の乱によって瀬戸の工人が美濃に移住したとする瀬戸山離散説を検討したうえで、近世の各陶業集落の成立・立地を論じたもの。

以上が、いちおう歴史地理分野として分類されている(と考えられる)19編であるが、他にも日下雅義「『狭山池』近傍の地形環境と湖岸の変遷史」や原秀禎「古墳の立地に関する基礎的研究(1)」のように、歴史地理にとって大いに参考となる論文も収録されている。

先に述べたように、この種の論文集を評価することは、きわめて困難でありかつまた、それほど大きな意義をもつものでもない。それは収録されている各論文が、それぞれ独立して1人歩きをしているからでもある。

しかし総体的にいえば、この論文集において谷岡地理学の広さと緻密さがみごとに具現化している、といえるのではあるまいか、そしてこの傾向は、とりわけ先に紹介した歴史地理分野において、いっそう強く感じられるように思う。すべての論文がきわめて高い学術的水準にある、というような意図が評者にあるわけではない。誤解を恐れず率直にいうならば、多くは各執筆者の研究の延長線上にあるものであり、驚嘆するほどの新しい視点が提示されているものはごく少ない。ところが各論文のタイトルが示す簡潔さと具体的な明解さによっても容易に理解できるように、その全てが精密なフィールド調査に立脚した堅実無比なものであることは誰しもが異論のないところであろう。もっともこの堅実さのゆえに、たとえば本論文集に歴史地理学における地表空間組織を理論的に思索した論文が見当たらないという不満も生じてくるのではあろうが、しかしそれにもまして大地に根ざした堅牢さを高く評価すべきではあるまいか。スマートな抽象的理論が大した反省もなしに何故か賢明であるかのように受け容れられやすい風潮は、最近の地理学においても、やはり認められる。そのような中であって本論文集に見られる、良い意味での泥臭さには、爽快感を感じるのである。立命館大学の地理教室といえ、過去いく人もの著名な歴史地理学者によって培われてきた歴史地理学の伝統を思いうかべるのは、評者1人だけではないであろう。この伝統が今後もますます発展することを祈りたい。(高橋誠一・滋賀大)

藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編 日本歴史地理用語辞典：柏書房、1981年、A5判 615頁、9,800円

このたび、初の歴史地理学専門の辞典が刊行されたことは、斯学の発展にとって、誠に喜びにたえない。およそ、学術用語の定義・統一は、当該学問の進展の上で、その基盤ともいえる事柄である。したがって、本学会の創設期以降、斯学研究者の間では、機会あるごとに、用語の定義・統一に関する論議が起こっていた。また、歴史地理学研究の特異性に関心をもつ隣接科学研究者の間からも、歴史地理学用語解説への要望が高まっていた。本辞典は、こうした長い間の事情を背景にして誕生したものであろう。

2,000を越える項目について、斯学の先端をいく120余名の先生方などが、執筆されている。とりわ